

●はじめての講義運営

——不安と焦り

私は、大学教員として丸一年が過ぎた二年目から、本格的な講義を受け持つことになった。大学教員になるまでは民間会社の研究員やポスドクとしての研究活動が中心で、講義の経験はなかった。主な担当科目は森林環境に関する二つの選択科目で、いずれも受講者数は七〇〇八〇人である。

どのように講義を進めるか不安を感じていた矢先、『教員のためのキャリア支援マニュアル』が手元に届いた。これは東京農業大学のキャリアセンターが編集した冊子で、講義の運営方法も簡潔にまとめられており、新任教員の私にとって非常に心強い存在となった。ただ、実際の講義経験はほとんどないため、マニュアルを頭にたたき込んでも体得できるわけがなく、初回講義が近づくとつれて気持ちは焦るばかりだった。事前対策として、一度だけ知っている他学科教員の講義を拝見したが、これは講義の雰囲気を知るうえで有効だった。

●私の授業実践——教育現場の最前線から

学生に学ぶ講義運営

——学生の「気つき」を引き出す

橋 隆一

●東京農業大学地域環境科学部准教授



●講義運営の工夫

——「気つき」を引き出す

講義では、A五用紙の紙一枚に講義に対する質問や感想などコメントを書いてもらい、次回講義の冒頭でそのいくつかを紹介して回答したり、補足説明したりしている。また、関連する新聞記事や書籍などがあれば積極的に資料として紹介する。コメント提出は成績評価の対象にはせず、基本的に書きたい学生が書くスタイルである。これは、初めて講義を受け持つにあたり、必ず試みたいことの一つだった。しかし、実はこの試みは当初あまり深く考えず、ただ単純に学生の声は大事だと何となく思ったにすぎなかった。

ところが、全一五回の講義が終わって振り返ると、学生からの声を聞くことは講義運営にとって非常に有用な手段であることに気がついた。その理由は、何よりも学生の興味や理解が手にとるようにわかるということ、同時に私の勉強不足、説明不足もダイレクトに気づかされることにある。少々恥ずかしい気もするが、次に学生からの実際のコメントを紹介していく。

●学生からの声・声——新任教員の試行錯誤

実際に講義が始まると、板書の文字の大きさや濃さ、黒板の使い方、スライド説明と板書のバランスなど、さまざま課題が続出した。講義を進めながら課題に気づくわけだが、いずれも改善策を知らないわけで、結局、学生のコメントから改善点を教えてもらうことになった。例えば、板書では当初ズラズラと一行を長く書いていたが、「黒板を三等分したほうがいい」と指摘を受け、なるほどと思って改善した。また、自信がないためにそうなると思うのだが、「時間がたつにつれ文字がだんだん小さくなる」という指摘や、「スライド中心より板書中心の講義のほうが集中できる」「眠くなるので板書して欲しい」という要望もあった。板書の内容については「口頭で別の説明も欲しい」という注文もあった。講義冒頭で配布するプリントについては、「書き込めるようになつていて良い」「方針がわかりやすい」「心構えができた」と好評だった。一方、「プリントを読むときの声のトーンが落ちるので雰囲気は暗くなる」とのコメントもあった。地声の低さに加え、私は仏頂面であるため「おもしろくなくさそう」と思われたようである。また、板書中に教室後方で私語があったとき、私が「何か違うところがあったか」と聞くと私語がやむということが何度もあり、それに対し「おもしろい」「講義が受けやすい」という感想もあった。

一方で、やや図々しくいろいろと細かく指摘する学生もいた。「専門用語は図だけではわからないので写真で欲しい」

「その日の内容を講義の最後に二、三分程度で簡単にまとめしてほしい」「板書も文字の大きさも十分なのでこの調子でお願いします。ただ書く量が多くなると試験勉強が大変なので、範囲を絞ってもらえるとやりやすい」などである。学生の気持ちは理解できるが、こういつたコメントが来ると、いったいどこまで学生の意見を取り入れるべきなのか、なぜ教員の自分がこまで言われなさいといけないのか、ずいぶん悩まされた。衝撃的だったのは、講義に悪戦苦闘していた時期に、匿名で出された「素人なの？ もっとがんばりなさい」というコメントである。さらには「具体的に言うのと、黒板をもっときれいに使ってください。あちこちいろいろなところに書いていると、何が何だかわからなくなる」というのもあった。その結果、毎週の講義がすらくなり、食欲もなくなつて、学生から「毎週やせていきますけど、大丈夫ですか」と言われたほどである。

しかし、改善努力のかいあってか「文字が大きくなつてわかりやすくなつた」「板書がわかりやすい」「黒板が三分割でわかりやすい」、そして「いつも丁寧に講義していただきありがとうございます」「他の先生に見学してもらいたい」「応援しています」など温かい励ましが目立つようになり、何とか心も体も持ち直した。

最終的に九〇分の講義では、スライドに三〇分、板書に三〇分、残りの三〇分は口頭説明や前回の復習などにあてるようおおむね三分割し、時間配分のバランスを保てるようになった。

った。

最終回の講義では「最初はどうかと思いましたが、何とか良くなりましたよ」「だんだんと受けやすくなっていた」という感想の一方で、「前半のほうが重要度で差が出ていましたが、後半はペースをつかんだのか進み方がパターン化していた」という鋭い意見もあった。しかしながら、「とてもまじめな講義で、私たちの意見を入れてくれたことをうれしく思った」「先生のやる気が伝わる」「伝えようとしてくれる姿勢が良かった」とのコメントもあり、講義運営に奮闘している私自身の姿を学生たちが認識してくれていることを実感した。

●学生の気持ちをつかめるか——講義冒頭のつかみ

全一五回の講義で七、八センチの厚みにもなるコメント用紙の束は、私にとって宝物である。教員としては、コメントに目を通し回答するという作業は大変であるが、学生がわからないところ、私が説明できていないところは最初の一年だけでもよくわかった。毎年、同様の質問は出てくるので、二年目以降はあらかじめ「以前にこういう質問があった」と過去の質問と回答を紹介するようにしている。それを何年か積み重ねれば、どこがわかりにくい箇所かあぶりだされてくると思う。

質問や感想などコメントを書く機会自体に対しては「とても良かった」という意見が多く、「小さな疑問を書いたら、翌週先生が答えてくれた。小さな疑問でも人に聞くといろいろ

ろなことがわかる」「人の意見を聞いて、いろいろな考え方があることを知った」「他の学生の意見のレベルの高さに驚いた」「積極的に私たちの意見を扱ってくれて好感もてた」というコメントもあった。ほかには「文章で自分の考えを伝える難しさを感じたが、その練習ができる貴重な機会だった」と書いてくれる学生もいた。書かせることは学生の文章作成能力の向上にも一役買いそうである。

ただ、講義と関係ないことも記述してかまわないと説明しているためか、ときには「結婚って何ですか」「好きなアニメは何ですか」といった質問まで来る。講義冒頭の「つかみ」としてはこの手の質問への回答も必要だと思う。しかし、あまり質問回答コーナーでの雑談が長すぎると本来の講義時間が足りなくなると、今度は「時間がないなら質問コーナーは不要じゃないか」という意見も出たりする。

関連する新聞記事の積極的な資料配布については割合に好評で、「講義でやったことが普段の会話に出てくるのは、少し自慢できる場所です」あるいは「情報が新鮮なのでつねに広い視野で見る大切さを知ることができた」という反応もあって、講義で習ったことが実社会でも伝えられたり、使われたりしていることに気づいた学生たちは喜んでいった。

これら講義冒頭での補足説明や雑談による「つかみ」は重要である。加えて、冒頭で学生におおむねの講義の進め方も伝えることで、教員と学生の双方とも気持ちりが単調にならず、メリハリもつきやすくなる（少しは眠たくなりにくくなる）。

講義の導入部分で学生たちの気持ちはどうつかむのか、そしてつかめるのかは、その回の講義の良し悪しを左右する勝負どころかもしれない。

●初回講義の大切さ——その講義科目の目的は何か

全一五回の講義の中でも、特に第一回目の講義が非常に大事であることにはつきり気づいた。すなわち、その講義科目では何を目指しているのか、意義、目的を明確にすることが最も大事だと思う。さらには、学科、学部、大学、あるいは社会においてどういう位置づけなのか、どう関連するのか、そして、どこまで掘り下げるのか、どこに重きを置くのか。自然科学の話ならば、物理や化学、生物、地学など、どんな視点で講義を進めるのかということ、やはり最初に伝えなければならぬ。

所属する大学として、あるいは自分自身としてのその講義科目のオリジナリティと使命は何なのか。同じ講義科目名であっても大学や担当教員が異なれば、それらは同じ内容にはならない。そのことをまず学生に理解してもらわなければならない。そのためには、自分が所属する大学の教育理念をもう一度確認する必要がある。例えば東京農業大学は実学主義で、「実社会で活躍できる人材を育てる」ことを教育理念としている。講義を重ねるたびにこの点をあらためて認識することで、講義で学んだことが世の中にどう結びついているのか、どう活用できるのかという視点で教えるべきなのだ、私自身の考えも定まってきた。

●ただ本心の好む所に従うのみ——学生の熱気みなぎる教室へ私のデスクに飾っている言葉がある。

学は立志より要なるは莫し

而して立志もまたこれを強うるにあらす

ただ本心の好む所に従うのみ

江戸末期の大儒、佐藤一斎先生が残した言葉である。学生たちのやる気を強制的に引き出すようなことはできない。目標に向かう心を奮い立たせるには、まずは学生たち自らの声や「気づき」を引き出す必要がある。しかし、そのような講義を目指すとき、その運営方法に決まった形はない。そういう意味でも、学生たちにとっては多様な運営方法によるさまざまな講義にできるだけ多く触れることが大切になるのではないだろうか。そして、それらの講義を通じて、最終的に学生一人ひとりの「本心の好む所」が刺激されれば、学生たちは自ら目標に向かって心を奮い立たせるだろう。

学生たちの声を引き出すことは大変な作業である。しかしながら、学生たちは本当に素直に講義全体を見渡しており、講義運営について彼らの声から学ぶことは非常に多い。それだけではない。この作業は、実は自分たちが知らずにもっているユニークな視点や価値観に、学生たち自らが気づくという、貴重な機会にもなっている。

何らかの形で学生たちの「気づき」や「考え」をふんだんに引き出す講義ができれば、いざれ志をもった学生たちの熱気みなぎる教室になってゆくと信じている。

グローバルに活躍する女性リーダーの育成

細川 博文 ● 福岡女学院大学国際キャリア学部長

一 グローバル化と教育

福岡女学院は、一八八五(明治十八)年にアメリカ人宣教師ジェニー・ギール女史によって建てられた英和女学校を始まりとし、来年創立一二〇周年を迎える。学院は、小学校を除いて幼稚園、中学高等学校、短期大学部、大学・大学院、看護大学、そして生涯学習センターからなる総合学園である。しかし、長い間短期大学として存立したため大学の歴史はまだ浅く、来年開学二五周年を迎える。収容定員も二〇〇〇名ほどで、決して大きい大学ではない。これまで人文学部と人間関係学部の二学部で構成されていたものに、国際キャリア学部が加わり三学部構成になった。新学部は国際英語学科(定員五〇名)と国際キャリア学科(定員七〇名)の二学科からなる。

このように大学としては長い歴史をもつわけではない本学であるが、創立以来、女子教育と英語教育に力を入れ、その流れは変わることなく現在に引き継がれている。一八八五年といえば、まだ開国して間もないときであり、そのような時代に、三三歳の若さで太平洋を渡って宣教の途についたギ-

ル女史の情熱は、今からすれば想像を絶するものがある。英文学者でのちの文豪夏目漱石もまだ大学予備門をくぐったばかりの時代であった。漱石は幼少より漢学の才があったが、あえて英語に学びを変えたのは、明治の激動の中で列強より開国を迫られ、国際化が進み始めた当時の社会背景があったものと思われる。

開国から数えて一五〇年近くがたった今、「グローバル化」は日常化し、かつての驚きや目新しさはなくなった。わずかに一五〇年の間に何が起ったのか。グローバル化とは何かを考えることは、国際キャリアを教育目標に掲げる本学部にとって極めて重要な問題である。日本では、戦後の高度経済成長期を経て一九八〇年代あたりまでインターナショナルという言葉が頻繁に使われたが、人や情報の流れは国境を越え地球規模にまで広がり、グローバルとしか言いようのない現状をもたらした。こうした社会変動を引き起こした要因として当然経済の発展が挙げられるが、一九九〇年代に起きた情報革命がグローバル化を促進したことは否定しようがない。人の移動によって初めてもたらされた交流が、情報の移動によ





って物理的には動かずして地球規模の交流を可能にしたのである。情報がインターネットを通して世界中に配信され、ソーシャルネットワークが政治的な変動をもたらす、このような状況がわずか数十年のうちに起こり、それが瞬く間に大衆へと広まっていった事実は驚異的である。

宣教という使命を抱え太平洋を蒸気船で渡ったギール女史の命を受けて英文学を探究せんがためにイギリスへと渡った漱石とは異なる社会が、われわれの目の前に存在している。つまり、グローバル化によって「エリート」から「大衆」へと交流の主体が移ったのである。

大学教育についても同じで、かつてはひと握りのエリートが高等の教育を享受する場であった大学は、大衆化し一般の者が受ける教育機関へと様変わりした。問題は、こうした現状をどう受け止め、来たるべき将来にいかに対処するかであろう。大衆化を否定的にとらえる見方もあるが、そもそも教育は大衆化されてこそ意味のあるものである。社会がグローバル化し、地球規模で情報が流れる現代にあっ

て、大衆化した大学教育が担うべき責任と役割はかつてないほど大きいものとなった。

もう一つ重要な変化は、女性の社会進出である。本学の礎が築かれた時代は、まだ女子教育に対する社会的評価が低い時代であった。多くのキリスト教学校が女子の教育に力を入れたのは、そうした社会背景があったからである。しかし、時代が変わり女子の大学進学率が上昇するとともに、社会で活躍する女性の数も格段に増えた。法律もそうした動きを後押ししていると言える。その結果、キャリア観の育成は、男女を問わずすべての国民に求められる共通課題となったのである。ただ、女性が置かれている職場環境はまだまだ望ましいものであるとは言いがたい。特に女性がリーダー職に就くのは、欧米においても依然として難しいことが指摘されている。フェイスブックの最高業務執行責任者サンドバーグ女史が著書の中でこうした問題に触れ、世界的な話題となったのはつい最近の話である。

このような時代の中で国際キャリア学部の改組が計画された。そして、それを担う組織として選ばれたのが、人文学部英語学科であった。英語学科は、二〇〇三（平成十五）年に定員四〇名で開設された新しい学科であった。開設当初より多くの受験生を集め、地域では一定の評価を得ていたが、高度な英語力を育成するだけでなく時代に合った人材育成の必要性が議論され、最終的に学科増設ではなく新たな学部を開設する判断が下された。つまり、大衆化された時代にあっ

グローバルに活躍でき、かつリーダーとして社会を牽引して
いける女性を育成する学部の構築である。

もちろん少子化の進む中で学部を増設することは、小規模
の大学としてはリスクが伴うものであった。グローバル人材
育成を標榜した学部の評価は事前調査では高かったが、リス
クを承知で改組の動きを後押ししたのは、創立者の生き方であ
ったと考える。私学は創立者の使命に支えられ、建学の精
神のもとで学校教育が行われる。これはいつの時代にあつて
も、教育に仕える者として守らなければならない責務である。
学部として経営が成り立つか否かという点について検討が重
ねられたが、最終的な決断へと導いたのは、学部の教育目標
が創立者の使命に沿うものであったからだと考えている。ま
だ初年度であるが、受験者数や合格者の歩留まりを見ると、
こうした判断が社会から一定の評価を得たことがうかがえる。

二 教育理念

それではどのような教育理念の基で教育を行うのか。グロ
ーバル人材を育成する学部として当然、留学や海外でのイン
ターンシップ、フィールドワークといった制度を設けている。
しかし、このような制度は同様の教育目標を掲げる大学のほ
とんどがもっていると言つてよいであろう。さらに言えば、
大手の大学は、本学とは比較にならない規模でこうした制度
を整えている。つまり、規模においては比較できない状況に
ある。それでは本学のような小規模校ができることは何であ

ろうか。小規模校であるがゆえに実現できること、それを探
すことが開設準備の課題であった。結果として出てきた答え
は、「教育の質を徹底して上げること」であった。そして、
受験生や入学生に「約束」という形でそれを公表し、自ら戻
れない状況をつくることにした。六項目からなる約束は次の
とおりである。

(1) 「女性のリーダー」を育成します。

女性の社会進出が強く求められていますが、これから必要な
は「女性のリーダー」です。欧米においても女性のリーダーが少
ないことが指摘されています。女子大だからこそこの事実を真剣
に受け止めます。

(2) 「TOEIC七三〇点以上を目指した指導」を行います。

国際キャリアには高度な英語力が不可欠です。多くの企業がTO
EIC七三〇点を海外派遣などの目安にしています。卒業まで
毎年TOEIC・IPテストを実施して個別指導を行い、この基
準が満たせるように指導します。

(3) 「批判的思考力の育成」を図ります。

職場で求められるのは机上の知識ではなく使える知識です。ス
キルや専門領域の学習、留学、インターンシップなどを通して批
判的思考力を養います。答えのない問題へ挑戦する力、本質を見
抜く理解力を育成します。

(4) 「国際企業へのキャリア支援」を行います。

多くの企業が国境を越えて業務を行っています。学部独自で「国
際企業リスト」を作成し、個々のニーズに合ったキャリア支援を



入学時から行います。一・二年次はスタディ・アドバイザーが、三・四年次はゼミ教員がこの任にあたります。また、卒業後も継続して支援を続けられるようなネットワークを構築します。

(5)グローバル人材の育成は「学部」で行います。

高度な英語力や批判的思考力を育成するためには、各分野の専門家集団と教育指導ノウハウの有機的な統合が必要です。人文学部英語学科が一〇年かけて築いた英語指導法と学部のリソースをすべて使って人材育成を行います。

(6)専門領域は「学科」で深めます。

国際英語学科の専門領域・国際交流、英語教育、英語学。

国際キャリア学科の専門領域・国際ビジネス、異文化コミュニケーション、地域研究・国際協力。

初期二年はグローバル人材に必要な基盤能力を、そして後期二年は専門的知識・実践力を深めます。学科の特色はこの二年で明確になります。ただしここでも狭い領域の専門家をつくるのではなく、「仕事で世界につながる力」を育成します。

以上が自ら課した約束であるが、約束をしたからには守る責務がある。しかし、実現できない可能性のあることは

否定できない。そうであるなら約束をする意味はどこにあるのか。単なる学生募集の方略で終わるのか。いや、そうではない。それは学部の教員が自らに課した「不転の決意表明」であった。議論の中である教員が言った言葉が今も忘れられない。「自らの退路を断つべきだ」

教育で最も難しいのが、共通の目標に向かって協働作業を進めることである。特に高等教育機関はこれが至難の業である。大学の教員はそれぞれが高度な専門領域を有している。その分野のプロが集まる場所である。したがって、専門領域の垣根も高い。また、教育をプログラムのに行うことに否定的な教員も多い。しかし、教育を受ける側の学生はどうであろうか。人材育成を目的にした学部で教員がそれぞれの城にこもって他教科との関連をもたなければ、学生の能力を開発することは不可能であろう。お互いがそれぞれの専門領域を尊重し、人材育成の目的を達成するために教育内容を調整する。まずこれが発点であり、今まさに動き始めたところである。

本学部のもう一つの特徴は、「学部」と「学科」の責任を明確にしたことである。一般的に教員は所属学科への忠誠心が強く、学部は単なる統合体にすぎない大学が多い。日頃接している教員間の結びつきが強くなるのは集団心理から言えば自然なことかもしれないが、人材育成には障害となる。そこで考えたのが「学部」と「学科」の責任分担であった。学科は当然それぞれの専門領域を教授する責任がある。しかし、人材育成は小規模な学科単位では限界があり、学部の総力を

挙げて臨む必要がある。したがって、基盤となる「リーダーシップ力」「英語力」「批判的思考力」の育成は学部で責任をもつて行う。成果が上がらなければ、学部教員全員の責任である。こうすることで教員が学科を超えてコミュニケーションを図り、協働作業を行うことになる。まだ、始まったばかりだが、必ず成果が出るものと期待している。

三 カリキュラムの特徴

両学科とも「女性のグローバル人材育成」を教育目標とし、英語スキル科目（必修）、専門領域科目（選択）、総合演習科目（必修）、留学プログラム（選択）、フィールドワーク・インターンシップ科目（選択）で構成する。

(一) 国際英語学科

・英語スキル科目

一・二年度に、英語の四技能を育成するための必修のスキル科目を合計二八単位設ける。すべて英語を使って授業を行い、科目名にかかわらず四技能を使った総合的な英語力を育成する。一年次には「Critical Thinking」科目を通して、英語を使った分析力・論理的思考力を育成する。二年次はアカデミックな英語能力を育成する。「Discussion Skills」科目を通して、積極的に意見を発信する能力をつける。

・専門領域科目

① 国際交流分野

国際交流を広義にとらえ、国際問題や欧米文化の理解を通

して、国際関係を体系的に理解するとともに、フィールドワーク科目や交流マネージメントに関する科目を通して実践力を育成する。

② 英語教育分野

児童英語及び中学高等学校での英語指導に適切に対応できる能力を養う。英語指導法や言語習得理論を理解したうえで、模擬授業や提携校での授業見学などを通して、応用力・実践力を育成する。

③ 英語学分野

英語学の概念的科目から専門性の高い科目まで演習形式で指導する。言語哲学から意味論・語用論など言語の使用を含めて言語に対する理解を深める。

(二) 国際キャリア学科

・英語スキル科目

一・二年度に、英語の四技能を育成するための必修のスキル科目を合計二八単位設ける。すべて英語を使って授業を行うため、科目名にかかわらず四技能を使った総合的な英語力を育成する。一年次は、「Introduction to Global Career」科目を置いて世界のキャリアに目を向けさせる。二年次は「Business Communication」「Business Reading」科目を通してビジネスで役立つ英語力を育成する。

・専門領域科目

① 国際キャリア分野

企業で求められるビジネスの基礎知識（国際金融、国際マ

「ケテイングなど」を提供して、国際ビジネスに不可欠な能力を養う。ミクロなビジネス領域に焦点を当ててではなく、さまざまな事柄に柔軟に対処できる基礎力・思考力を育成する。また、企業と連携したオムニバス講義科目を設け、現場の理解を早くから育てる。

② 異文化コミュニケーション分野

異文化コミュニケーションやコミュニケーション方略などメタ認知を育成する科目を置く。また、幅広い国際教養をつけるために、英米文学や世界文学の科目を設け、異文化の理解を図る。

③ 地域研究・国際協力分野

アメリカ・アジア・日本に関する地域研究科目を設け、文化や政治システム、国際協力などに関する基礎力を育成する。また、日本関係の科目を設け、アジアからの留学生の日本理解を支援する。

(三) 両学科に共通する項目として次の科目群を置く

・総合演習科目

総合演習科目は六科目（必修）を設定する。一年次に「Freshers Seminar」科目を設け、大学での学習・研究に必要な基本学習スキルを育成する。また、三年次に「Junior Seminar」科目、四年次に「Senior Seminar」科目を設定して、ゼミ形式で専門分野の研究を行う。研究成果は毎学期、論文形式にまとめる。

・留学プログラム

選択科目として「Short Overseas」「Study Abroad」科目を設け、留学を通して体験型・課題解決型学習を推進する。

「Study Abroad」科目においては、一学期間一六単位、二学期間三二単位の取得が可能である。「Short Overseas」科目（五週間）では六単位の取得ができる。

・フィールドワーク・インターンシップ科目

専門知識を実践の場で応用できる能力や創造性を養う目的で、フィールドワーク科目を設ける。また、企業と連携をとって指導にあたり、実務経験が大学での学習をさらに活性化させるよう配慮する。

四 将来の展望

国もグローバル人材の育成に力を入れており、今後こうした学部学科が全国的に増加するであろう。重要な点は、グローバル人材に求められる能力とは何かという、根本的な問題を継続して研究することである。そのためにも企業との連携は不可欠となるが、大学と企業との間には長らく相互不信があった。人材育成は両者にとって待ったなしの課題であり、互いが歩み寄り、人材育成のための環境整備を行うことが急がれる。また、看板倒れで結果が出せない大学は、遅かれ早かれ淘汰されていくであろう。結果を出すためにもプログラムのな教育を再評価して、教員組織が一体となって教育に従事することが求められる。本学部の実験的教育が、人材育成プログラムの構築に若干でも貢献できれば幸いである。

井上 寿一 ●学習院大学学長

桑尾 光太郎 ●学習院アーカイブズ職員

私学としての再出発と大学開学

一 廃墟からの再興

一九四五（昭和二十）年四月一三日、東京目白の学習院は空襲を受け、木造校舎の大半を焼失した。五月二五日には青山の女子学習院、四谷の学習院初等科が空襲で被災し、特に女子学習院は一部の鉄筋建物を除いてすべてを焼失した。八月一五日の敗戦

焼失した目白校地



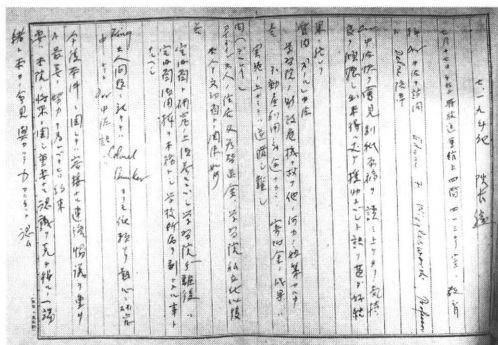
の詔勅ののち、疎開・勤労動員あるいは学徒出陣によって東京を離れていた学生徒は、徐々に学校に戻り一〇月から授業が再開された。男女の学習院は、廃墟の中から再生を始めなけれ

ばならなかった。

学習院は、幕末の一八四七（弘化四）年、京都に設けられた公家の教育機関を源流とし、一八七七（明治十）年に改めて東京に華族の教育を目的として開校した。一八八四（明治十七）年に宮内省所管の官立学校となり、翌八五（明治十八）年には女子教育が分かれて華族女学校が開校した。華族女学校は、学習院女学校、女子学習院と改編されながら独自の一貫教育を続けた。男女の学習院には当初より士族・平民が入学していたが、両校の「学制」冒頭には、「両陛下ノ優旨ヲ体シ華族ノ」男子・女子の教育を目的とすることがうたわれていた。

授業再開にあたり緊急の課題は校舎の確保で、校舎の大部分を焼失し、青山の校地も接収された女子学習院にとってより深刻であった。一九四五年一月、女子学習院は大崎にあった旧海軍大学校跡地の使用を申請したが、GHQ民間情報教育局（CIE）はそれを否認した。CIEは学習院・女子学習院を「身分制を維持する機関」と見なし、日本の民主化に反する存在と認

山梨院長とCIEとの交渉記録



識したからである。一二月、両学習院は学制から華族教育を目的とする条文を削除した。要するに一般の学校となったわけで、宮内省所管である必要はなくなる。翌一九四六(昭和二十一年)年から、両学習院は宮内省から分離しての財団法人化をめざし、私立学校として生き残る道を模索し始める。

二 存続の危機とその打開

両学習院が宮内省から独立するための最低の条件は、使用していた校地・校舎及び運営のための基金を、宮内省から下賜すなわち移管することであった。宮内省の所管であった両学習院の動産・不動産は

皇室財産に含まれ、その皇室財産はGHQに差し押さえられて国有財産とされていた。CIEは宮内省の財産が公金であることを理由に、一九四六年五月に学習院への基金下賜の要望を却下した。学習院は存続の危機に立たされたのである。

事態打開のため、山梨勝之進学習院長をはじめとする学習院・宮内省側

は、CIEとの交渉を重ね、新たな学校として生まれ変わるることによって基金下賜の承諾を得ようとした。写真は七月七日に行われたCIE教育局長オア中佐との会談の様相を記した山梨のメモで、オアが「出来得ル丈ケ援助スベシト語り甚ダ好結果ニ終レリ」と記されている。交渉では、当時中等科に在学していた皇太子明仁親王の教育が話題となり、メモには皇太子の家庭教師をつとめ学習院で教鞭を執るヴァニング(E.G.Vining)の名も記されている。同文書中の山梨の直筆による請願書草稿には、「要スルニ学習院ハ茲ニ存亡ノ危機ニ瀕シツ、アリ……何トカシテ此窮境ヲ突破シタシ」との、危機的状況が生々しく記されている。

こうして交渉が重ねられる中、CIEから学習院側に対して、特色ある私立学校の理念としてSchool of Governmentが提案された。「スクール・オブ・ガヴァメント」とは、政治・行政面での指導的人物の養成を目的とした学校を意味し、民主的な教育によって将来の指導者を育てようというものであった。九月三〇日、学習院財団準備委員会がCIEに提出した「新学習院の目的と方策」は、スクール・オブ・ガヴァメントの理念と、「民主」「平等」「進歩的」といった戦後民主主義を象徴する語句が盛り込まれ、何としても学習院を残すのだという、強い意気込みを感じさせる文面となっている。

吾々の意向は、学習院及び女子学習院の法律上の身分を単に財団法人なる身分へ転ずるだけで、その現在の形式の儘にて継続させることなく、寧ろ過去の伝統に妨げら

る、ことなく、一大飛躍をして、真に民主的な学校として、万人の受け得る、徹底的な文化的教育の新たな進路に発足せしめ、これら両校よりなる唯一つの、無比にして前例なき学校、即ち政治行政に於ける諸種の面 (art and science of government) の実際的及学問的研究並びに社会及び、政治生活の各様相の研究に、第一義的なる注意を集中するものを設立せんとするにある。

本院の目的は、男女学生に平等的に左を修得せしむべく訓練するにある。

(一) 民主的体制の裡より、個人の人格の最も充実せる発達。

(二) 国際主義の深き認識へ結びついた民主主義に於て、公民的義務の意義を充分に把握すること。

(三) 新生日本の全社会層に於ける一般的政治生活と行政に關して、充分なる基礎的且實際的智識及び理解、即ち国家的及び国際的政治生活に積極的に関与するため準備たるべきもの。

こうした交渉を経て、CIEは学習院が計画する教育目的・教育方針を承認し、学習院はようやく私立学校として存続できる目処が立った。しかし、四六年一二月末に下賜が認められた基金は、希望額の八〇〇万円から三五〇万円に引き下げられ、混乱の中で得た女子学習院の戸山校地も、財団法人への譲渡が認められず国から借用する形が続くこととなった。存続の危機を免れたとはいえ、私立学習院は苦難の船出

を約束されたのである。

存続交渉の中心にいた山梨勝之進は、四六年一〇月に院長を辞任し、代わって前文部大臣の安倍能成が院長に就任した。安倍は哲学者として活躍するとともに、京城帝国大学文学部長・第一高等学校長などを歴任し、戦時中は軍国主義から距離を保ち続けた。敗戦後は文相に続いて教育刷新委員会の委員長を務めるなど、戦後教育改革に着手したことも知られる。安倍院長は、抜群のリーダーシップをもって学習院の再生に尽力することとなる。

三 木から落ちた猿——私学経営の苦闘

一九四七(昭和二十二)年三月三十一日、学習院と女子学習院は宮内省から離れて合併し、財団法人学習院が発足、四月一日から私立学校としての出発を果たした。新たな学習院学則は、「本院は総ての社会的地位、身分に拘らず、広く男女学生を教育することを本旨とし、人文教育の理念に基き、これ等男女に初等教育より高等教育に至る一貫した教養を与へ高潔なる人格、確乎たる識見並びに近代人たるにふさはしき健全にして豊かなる思想感情を培ひ、以て人類と祖国とに奉仕する人材に育成すること」を目的にうたっている。

同年四月一日は、学校教育法・教育基本法が施行された戦後教育出発の日でもあり、学習院は新制初等科・中等科・女子中等科を、翌一九四八(昭和二十三)年に新制高等科・女子高等科を開設した。新制大学も財団法人化当初から構想さ



れ、安倍能成院長は四七年一〇月五日の理事会において、大
学新設に関し「自由ナノビノビシタ教育ヲスルト云フコトト、
逼迫シタ現下ノ社会ニ直チニ役立つ人間ヲ養成スルト云フコ
トヲ如何ニ調和セシムルカハ、慎重ニ研究スベキ問題デア
ルガ、ホントウニ教養アル人間ヲ養フテ行キタイト思フ」との
抱負を述べている。教養教育と専門教育との調和という課題
は、新制大学の発足以来、現在もおこなわれている。

私学となつて間もない学習院にとつて最大の課題は、やは
り財政難の克服であつた。授業料の値上げをはじめ、卒業生
や学生の父母などからの募金活動が積極的に行われることも
に、父母会や卒業生の支援を得て「復興バザー」を開催し、
その売り上げを施設の改善や教材費に充てるなどの方策がと
られた。構内の樹木を伐採して薪や炭を作つて教職員にボー
ナス代わりに配り、池の周りで養豚や椎茸栽培を行うといつ
た涙ぐましい努力も

行われた。

寄付の依頼には、

安倍院長自ら中古車
に乗つて奔走した。

安倍は国の庇護から
切り離され「木から
落ちた猿のやうな学
習院」について、「寄
附が集まらねば、学

習院はくたばる外はない」(『私のあゆみ』一九四九年)と記
している。先の見えない学習院の経営は、安倍をもつてして
も辛かつたようで、一九四八年初めに安倍は院長を辞任して
後任を天野貞祐に託し、兼職していた東京国立博物館長の職
に専念しようとした。しかし学習院の教員に翻意を求められ
て辞任を踏みとどまり、この後安倍は一九六六(昭和四十一)
年の死去までを学習院にささげた。

ところで、資金に困るのであれば、学習院の所管を宮内省
から文部省に移して国立学校にする可能性はなかつたのだろ
うか。戦前から学習院に在職し、「白鉢巻をして坐込みでも
やりかねない有様」(『学習院新聞』一九五七年一〇月七日)
で安倍に辞意撤回を懇請した櫻井和市と児玉幸多は、後年
「私立にするか国立に移管するかという時代に、国立に移管
する可能性は充分あつたんですか」という問いに対して次の
ように答えている。

櫻井「和市院長・一九四七年当時学習院教授」そこまでは
働きかけなかつたけど、やればあつたんです。

児玉「幸多大学長・一九四七年当時学習院中等科長」宮内
省の持つていた学習院も、文部省に移そうと思えば、そ
れは可能性あつたわけです。それは、さつき院長が言わ
れたように、学校の非常に重大な問題でしたから、非常
な議論があつたわけですね。それで、結果としては、富
永「惣一・一九四七年当時学習院教授」説だけではなかつた
かもしれないが、独自のものをやつていくためには、

私立でなければということ、私立になったことは確かです(略)。

櫻井 宮内省から離れてどうするかという点ですね。私学になるか国立に移管するかということでもかなり議論をしました。そして、富永君等は、学習院の昔からの自由な行き方を残すためには、国立なんかにしたんじゃだめだから私学にして…、という考え方が強かった(「大学文学部関係座談会」一九七五年 学習院アーカイブズ蔵)

「学習院の昔からの自由な行き方」を残し、「独自のものをやっていく」ためには、国立ではなく私立で、という判断だったというのである。その「自由な行き方」に関連して、一九四七年に学習院高等科(旧制)に入学した吉村昭は、次のように回想している。

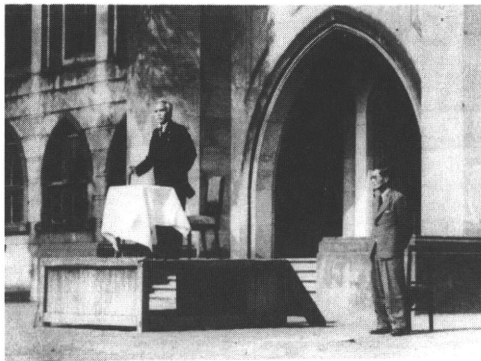
二月、私はまたも旧制学習院高等科文科の入学試験を受け、合格した。(略) 私が、前年に学習院高等科の試験に合格しながらその資格を自ら放棄したのは、戦後一般に開放されたとは言え、終戦時まで旧華族階級の子弟のみに入学を許されている特殊な教育機関で、私には無縁のものであると思っていたからである。それなのに、結局、入学したのは、その学校が官立大学へ進む門戸の一つであったため、私は、不本意ながら入学したのである。

しかし、入学した私は、学内の空気が想像していたものとは、かなり異なっていることを知った。中等科から進学してきた、いわゆる旧華族の子弟たちはのびやかな性格の

者が多く、いたずら好きの学生もいた。教師たちは厳しい授業をする反面、そのような学生の気風を許容する鷹揚さがあり、自由を重んじる姿勢が感じられた。私は安堵をおぼえ、かれらの間にとけこんでいった(『私の文学漂流』)。不本意入学であったにもかかわらず、「のびやかな性格の者」や「自由を重んずる姿勢」に安堵を感じた吉村は、のちに文芸部に入って創作活動を始めた。

四 学習院大学の開学——学問への情熱

一九四九(昭和二十四)年四月一日、新制学習院大学が発足した。初代学長は安倍能成院長が兼任し、文政学部(政治



大学開講式(1949年5月11日)

学科・哲学科・文学科)と理学部(物理学科・化学科)が設置された。初年度の入学者は四〇六名(うち女子七名)、専任教員(旧制高等科との兼任を含む)は三七名であった。学生が登校したのは五月に入ってからで、一日に開講式兼入学式が挙行されたが、学生全員を収容できる教室や講堂

がなく、式はグラウンドで行われた。

大学開学当初は授業料が払えない学生、あるいは健康上の理由から退学する学生が続出し、四九年の秋には学生の約六割が授業料を払っていなかった。安倍学長はことあるごとに「正直であれ」と説くとともに、学生を見ると「君たちは授業料を払ったか。授業料を払いなさい」と言うのが口癖だったという。

初期の学習院大学にとって深刻な問題は、志願者が思うように集まらないことであった。その理由の一つに、学習院に対する、かつての上流階級の学校「庶民には縁遠い」という先入観が根強く残り、受験生に進路の一つとして選択されにくいことがあった。安倍学長はたびたび受験雑誌に寄稿し、「学習院はもはや昔の学習院ではない」ことを強調しなければならなかった。「特別な学校」と見られる誤解を解くとともに、学習院大学をアピールし志願者の増加を図る必要があった。

その方策のひとつとして、教員による大学広報のための講演会が全国各地で開かれた。一九五三（昭和二十八）年に高松での講演の際、聴衆がわずかしか集まらなかったときの光景を、その一人だった高校生が後年次のように記している。

文相だった安倍氏、漱石門下の小宮「豊隆・文学部長」氏の名は、田舎の高校生でも知っていた。高名な人たちの話をじかに聞いてみたいという気持ちだけで、夕方、自転車を走らせてかけつけた。

だが、この日やってきた聴衆は、ほかに中年の男性が二人だけだった。安倍氏は「何分、宣伝に慣れていないもので……」と苦笑しながら、それでも三人を相手に話をした。あとの二氏の講演も、予告通りで手抜きはなかった。

暖房もなく、寒々とした会場だったが、終わったとき何か胸に温かいものが宿ったのを覚えている。とりわけ、とつ弁の舞出「長五郎・政経学部長」氏が、難しい経済の話を理解させようとして、懸命に語った姿が感動的だった。

大学の先生の、自分の学問にかける情熱、それを人々に伝えたいとする使命感といったものに、初めて接した思いがした。「そうか、大学に行けば、こういう講義が聴けるのか」と、具体的なイメージがわいてきた。「聴衆三人」

『朝日新聞』一九八七年四月一八日

安倍能成・小宮豊隆・舞出長五郎といったいわば大御所教授たちが、わずかな聴衆に向かって懸命に話をする姿からは、学問にかける情熱とともに、大学を作り上げていこうとする強い思いが伝わってくる。こうした情熱こそ戦後学習院の初心であり、学習院大学で研究教育に携わる者として継承していくべきものであろう。

一九五〇年代後半から本格化する日本の経済復興・高度成長に沿った形で、学習院大学は志願者数・在籍学生数を増加させ、経営も安定に向かっていた。他方で初期の経営難の中、教職員や関係者の地道な努力が続けられていたことを忘れてはならない。

大学がドラマ・映画のロケ地となる理由

小林 真詩 ●文教大学学園広報マーケティング室課長

●二つのキャンパスの特性と事例

文教大学には、越谷キャンパス（埼玉県越谷市）と湘南キャンパス（神奈川県茅ヶ崎市）の二つのキャンパスがある。地域や学部構成、開学時期も異なるので、キャンパスの特性や雰囲気も当然に違っている。

越谷キャンパスが開学したのは一九六六（昭和四十一）年。校舎のリニューアルが進んでいるが、まだその当時の建物も存在する。そういう古い雰囲気を期待してか、「輪廻」（清水崇監督・二〇〇六年）のようなホラー映画や警察署内の取調室前の廊下などのうす暗いシーンを撮るテレビドラマに問い合わせが多かった。

ほかに事例を挙げると、映画では

・「中学生 円山」宮藤官九郎監督・脚本、二〇一三年

キャスト…草薙剛、平岡拓真、坂井真紀ほか
また、テレビドラマでは

・「探偵学園Q」日本テレビ、二〇〇七年

キャスト…神木隆之介、志田未来、山田涼介ほか
などがある。

ドラマ「探偵学園Q」の撮影は、休日に図書館を使用した。効果的な照明で日中の撮影とは思えない演出を施し、書架の間にレールを敷き、臨場感あふれるシーンに結びつけていた。湘南キャンパスは、一九八五（昭和六十）年に開学。校舎はイタリア山岳中世都市シエナのカンポ広場をもとにした設計で、風と緑と赤レンガが調和して洗練されたデザインになっている。その美しいキャンパスのイメージが評判を呼び、これまで上戸彩主演によるテレビドラマ「エースをねらえ！」や各種のテレビCMなど、多数の問い合わせがあった。直近の事例を挙げると、テレビドラマで、

・「三毛猫ホームズの推理」日本テレビ、二〇一二年

キャスト…相葉雅紀、マツコ・デラックスほか

・「夜行観覧車」TBS、二〇一三年

キャスト…鈴木京香、石田ゆり子、高橋克典ほか
などがある。

「三毛猫ホームズの推理」では、ドラマの中での事件が起



こつた大学という設定で、各号館や弓道場、内庭などが使用され、特に第一話では全編にわたりキャンパスのシーンが登場した。また「夜行観覧車」では、ドラマの中の名門高等学校という設定で、入学試験会場や合格発表会場、高校生活風景として内庭や教室が使用された。

●ロケ地として提供することのメリット

地方自治体では町おこしも兼ねて、ロケ地を誘致する「フィルムコミッション」が盛んである。その活動の多くは、知名度向上や観光の振興が目的だが、大学も対外的に同じような理由で誘致に積極的などころもあると思われる。

学内的には、在学生や卒業生にとっては、自分たちの知るキャンパスがテレビ放送されることや、大学名が番組のエンドロールの中で「ロケ協力」として表示されることを誇らしく感じている。受験生にとっても、見学時やオープンキャンパスなどでそのことの説明が好意的に受け取られている。その後の話の「つかみ」として、とても有効となっている。また、湘南キャンパスには情報学部があり、メディア・番組制作などに関連することを学んでいる学生にとっては、身近なところで撮影が行われているのを目の当たりにすることで、新たな刺激を受けている。学生以外に教職員や保護者など、学園関係者も、同様に喜びを感じており、帰属意識も高まり、ブランド感の醸成に役立っている。

制作側にもメリットがあると考ええる。撮影セットを設営しなくても整った建物がある。使用料も安価である。休日や夜間など、時間を集中して利用でき、東京近郊のキャンパスであれば日帰りが可能であるし、キャストもエキストラも集まりやすいという好条件がそろっている。若者が集う大学キャンパスを使用することで、その話題がSNSによる口コミの伝播にも効果が期待でき、番組宣伝の広報にもなっている。

貸し出しによる施設設備の破損、休日や夜間の撮影による職員の出勤対応など、デメリットもないわけではないが、それはそれとしても、大学のキャンパス環境も重要な広報ツールの一つ（財産）と考える。有効利用は図るべきである。大学がロケ地となる理由は、社会の要請でもある。

学外者から見て、 魅力のある大学を目指す

奥島 尚樹 ●実践女子学園総合企画部部长

実践女子大学には、テレビドラマのロケ地としてキャンパスの利用願いがときどき舞い込んでくる。例えば、日野市内のロケーションに適した場所を紹介しているNPO法人日野映像支援隊を通しての依頼もあれば、直接本学に連絡してくるケースもある。ドラマのワンシーンの撮影もあれば、何週間もかけて長尺の撮影を行う連続ドラマの拠点となる場合もある。NHKの番組撮影では、教員の協力のもと、学生たちに出演してもらっての番組づくりもあった。

実践女子大学では映画の撮影本数はそれほどないが、テレビドラマの撮影の主なものは「ごくせん」(短期大学)、「G

実践女子大学日野キャンパス熾広場に置かれた
AKB48のプロモーションビデオ「細雪リグレット」のセット



TO」(大学)など。最近では、まるで実践女子大学の宣伝のように大学構内を隅々まで使ってくれた、AKB48のプロモーションビデオの撮影があり、女子大学ではあるが少々学内がざわめいたこともある。

いずれにしても、職員は、連絡を受けてこまごまとした調整をし、対応していくことになる。

撮影依頼が具体化するまでは、ドラマの内容容だけな

く、日程の確認・調整から、撮影に使用する校舎や場所の特定などを行う。いよいよ撮影開始となると、来校する出演者やスタッフ・車両の数の確認、さらには授業や課外活動の有無まで、本来の教育支援業務とは異なる対応が担当部署の者に求められる。日程によっては日曜・祝日の出勤の発生や撮り直しへの対応など、引き受けるにはそれなりの覚悟も必要となる。

そこまでして、なぜ撮影に協力するのかというと、撮影に際して学園に納入していただく利用料の収入も魅力ではあるが、できれば、在学する学生たちに、普段見慣れた自分たちの学び舎や施設を、あらためて見直してほしいという願いが大きい。

大学のキャンパスをテレビドラマなどの撮影に提供するということについては賛否両論あるかと思う。しかし、毎日通っている大学で学生にとっては見慣れた風景かもしれないが、外部の方にはまた違う魅力を醸し出していることもあるのだ。その結果、この校舎はこんなドラマに登場したといった話題は、オープンキャンパスで高校生と話すきっかけにもなる。加えて、在学生たちに、さまざまなメディアが使用料を払っても使いたい魅力的なキャンパスであることを認識してもらい、卒業後も「そういえば〇〇の撮影で使われていた」と懐かしく思い出してもらおうよすがとなれば、担当者之苦勞

も報われるのではないだろうか。

もちろん、学生たちにとって、一生懸命勉強した学び舎として記憶に残ることが一番ではある。

実践女子大学は平成二十六年四月、本学発展の地であった渋谷に、新たなキャンパスを開校した。最新鋭の設備を多彩に取り入れ、洗練されたインテリアが空間を彩る、明るい開放的な校舎は、自画自賛ではあるが魅力的に見える。学生たちも一生懸命学び、充実したキャンパスライフを送って、建物以上に魅力ある学生になってもらいたいと切に願うものがある。

実践女子大学創立120周年記念館(渋谷校舎)



加盟校の幸福度ランキングアップ

大学の撮影利用と 広報施策への活用

相川 徹人 ●東洋学園大学広報室部長

東洋学園大学は、東京・本郷と千葉・流山の二つのキャンパスを有している。中でも千葉・流山キャンパスは、都心から近い利便性と、豊かな自然に囲まれた赤レンガの校舎というイメージからか、ドラマや映画をはじめとしたさまざまな映像や写真の撮影地として広く利用されている。本稿では、大学がロケ地として利用されることの広報的メリットについて、最近の撮影事例に触れながら述べる。

●撮影利用・三つのメリット

第一のメリットとして、ロケ地として使用されることが、東洋学園大学、特に千葉・流山キャンパスの貴重な広報リソースになるということが挙げられる。

映像作品の舞台に選ばれることが、すぐに認知度の向上につながるということを期待しているわけではない。ほとんど

CMやMVの舞台となった第一グラウンド



の作品でシーン中に「東洋学園大学」と明示されることはなく、ドラマや映画のエンドロールに記載される程度だ。また、多くの視聴者がいちいちロケ地を意識しながら作品を見ているわけでもなく、画面を一瞥しただけですぐに本学だと気づくのは、学生や保護者、教職員などごく一部の人間だけであろう。

しかしながら、「ロケ地として選ばれた実績」は、その事実自体が「キャンパスが魅力的である」ことの裏づけとなりうる。千葉・流山キャンパスの校舎、教室や中庭などの雰囲気、グラウンドをはじめとするさまざまなファシリテイが、映像作品の舞台として選ばれるだけの魅力をもっている。その事実こそが、キャンパスの良さを広く知らしめるための貴重な広報リソースとな

先日も人気ドラマの特番を撮影していた中庭



るのである。

第二に、学生や教職員をはじめとする本学ステークホルダーのモチベーション向上というメリットが挙げられる。

近年の千葉・流山キャンパスでの撮影事例としては、40%という高視聴率も記憶に新しい「家政婦のミタ」や、幅広い層の支持を集める「相棒」などのテレビドラマ、阿部寛主演の「カラスの親指」をはじめとする映画のほか、「フロム・エー ナビ」のCMや「NMB48」のミュージックビデオ（MV）などがある。話題のドラマ、誰もが知っているCMなどのロケ地として選ばれたことや、撮影のために有名な俳優らが来学したことによって、自分の大学が世間に評価されたと感じ、大学について誇りをもつきっかけとなっているようだ。

実際に、「今、自分の大学がテレビに出ている」とTwitter

昨年夏に行われた民放ドラマの撮影風景



でつぶやいたり、撮影現場に遭遇して目を輝かせる学生たちも多い。

第三に、キャンパスの位置する流山市との連携強化という側面が挙げられる。

流山市では「流山市フィルムコミッション」を設置し、市を挙げて積極的に撮影を誘致している。本学としても、地域に根ざした大学として行政と連携・協力して、今後も積極的に誘致を行っていきたくと考えている。

●おわりに

東洋学園大学は今年度からキャンパスを再編し、千葉・流山キャンパスは、心理やスポーツ科学などさまざまな角度から「ひと」を総合的に学ぶ人間科学部の学び舎となった。アクセスの良さや豊かな自然、のびのびと学べる環境が整ったキャンパスの魅力をより広く知らしめるためにも、今後もロケ地としての活用には積極的に取り組んでいきたい。